

泡吹科	アハブキ、
鼠季科	イソノキ、クマヤナギ、ケンボナシ、ク ローメモドキ、
葡萄科	ツタ、ヤマブダウ、エビヅル、マヅル、 サンカクヅル、ビンボカヅラ、ノブタウ
田麻科	カラスノゴマ、シナノキ、
錦葵科	ムクゲ、
山茶科	ナヒ、バキ、ヒサカキ、
旌節科	キブチ、
大和草科	ヤマトグサ、
金絲桃科	トモヘサウ、オトギリサウ、マオトギリ
堇菜科	キンシバイ、
柳葉菜科	イブキスミレ、タチボスミレ、マスミレ
瑞香科	ツボスミレ、フジスミレ、エゾソミレ、 ツフヒスミレ、スミレ、シハイスマレ、 ヲニシバリ、ガンビ、
胡頹子科	ナハシログミ、ナハグミ、キグミ、
蘿摩科	イワバカナ、タニタデ、ウシタキサウ、 マロヨログサ、アカバナ、
爽竹桃科	アリノタウ、
灰木科	サハフタキ、
齊敦果科	エゴノキ、アサガラ、
木犀科	イボタノキ、ハシドイ、トネリコ、コバ ノトネリコ、ヒヒラ、
龍膽科	リンダウ、アルリンダウ、エケボノサウ センブリ、
テイカカヅラ、	
イケマ、カモメルアル、アルガシハ、ク サタチバナ、フナバラサウ、マイケマ、	
サイコ、カガイモ、	
ネナシカヅラ、ヒルガホ、	
ホタルヅラ、ホルキサア、タビラコ、	
ハイドクサウ、カリガネサウ、ヤブムラ サウ、ムラサキシサフ、クマツヅラ、	
イブキジヤコウサウ、イスニウジユ、ニ ガグサ、オドリマサウ、カイドフシ、ヤ	
マハノカ、フジテンニンサウ、アキノタ ムラサウ、メハジキ、ミヤバトウバナ、	
ミカヘリサウ、ヒキヲコシ、ラレウモン	
五加科	ハリギリ、ハナイカダ、トチバニンジン
薙形科	イブキバウフウ、カノスメサウ、タウキ タニセリモドキ、ダケセリ、ヤブジラミ ムカゴニンジン、ウマノシリバ、ミマバ ヤマニンジン、シシウド、センダウサウ
山茶夷科	セリ、ノタケ、センキユウ、 ミヅキ、
令法科	リマウブ、
鹿蹄草科	イチマクサウ、ウメガササウ、
石南科	イハナシ、ハナヒリノキ、ホツアヂ、ナ ハゼ、ウスノキ、ヤウラクツバチ、チ クシバ、カカモノ、アセビスノキ、モチ チヂ、
岩梅科	イハカミ、
紫金牛科	ヤブカウジ、
櫻草科	スマトラノヲ、オカトラノヲ、コナスピ クサレダメ、
柿樹科	シナノガキ、
茄科	カヅラ、ウツボグサ、クルマバナ、 イガホウヅキ、ハグカホウヅキ、クコ、 ヒヨドリジヨウゴ、
玄參科	ルリトラノヲ、タツナミグサ、クガイサ ウ、ヤマタヅナミ、ココメグサ、シホガ マギク、ヒヨクサウ、ヒキヨモギ、ゴマ ノハグサ、ミズホウヅツ、
列當科	ナンバンギセル、
苦苣苔科	マルバノホロジ、
爵牀科	ハケロサウ、キツ子ノマゴ、
車前草科	オホバコ、
茜草科	ハンカゲサ、ヘグソカヅラ、ヲバノキ、 カハラマツバ、ヤヘムグラ、アカ子、ヒ メヨツバクサ、キヌタサウ、テタムグラ
忍冬科	ニハトコ、ヲホカメノキ、ガマツミ、カ ンボク、タニウヅキ、ムシカル、ヤブデ マリ、ゴマギ、スピカヅラ、
敗醬科	ニミナヘシ、オトコヘシ、カノコサウ、 ナツユキサウ、
山蘿蔔科	ナヅナ、マツムシサウ、

葫蘆科 キマチャヤヅル、キカラスウズ、スズメウ
ミ、ゴキヅル、
桔梗科 ホタルブクロ、ソバナ、ツリガ子ニンジ
ン、ツルニンジン、キキヨウ、

菊科

イスヨモギ、イハニガナ、イナカキク、
ハハコグサ、ニガナ、チチコグサ、リウ
ノウギク、ヲホヨモギ、ヲケラ、ヲニタ
ビラコ、オトコヨモギ、ゾゾルマ、カン
ハハダマ、カウヤバヤウキ、カウゾリナ
カハラハハコ、ヨモギ、カンビビサウ、
カリモリサウ、ヨメナ、タムラサナ、ダ
ヒジンガサ、ノアザミ、ノブキ、ノギク
アマシロギク、ヤマジノフク、ヤブレガ
サ、ヤマアザミ、ヤマニガナ、ヤクシソ
ム、ヤブタバコ、ヤマホクチ、ヤマヨモ
ギ、ヤマタ、コンキク、フジバカマ、コ
ヤブタバコ、コンチク、ウシノゲシ、サ
ワアザミ、アキノハハコグサ、サンガン
クビサウ、ギヨウジャノミズ、マチャ、
ハグマ、メカカラカキ、ミヤマアザミ、

採集禁止植物

テンナンセウ、センブリ、ダイマンサウ、ワレモ
カフ、トコロ、イケコ、ヒメハギ、イブキトラノ
ヲ、ヤマハツカ、トチハニンジン、トリカブト、
アカネメウキ、ヤマシャクヤク、ツリガ子ニンジ
ン、センキユウ、リンダウ、イノコツチ、ハシリ
ドコロ、イブキヘナクジ、ワウレン、ヲミナヘシ
シシウド、キキヤウ、サラシナシヨウド、ヲケラ



田舎の四季

近藤徳三

陰風颶々たる聲猶激しき時、軒の梅花小さき唇より春を告ぐ。うち醒りたる藁屋の軒喚きたるは、殊更につくりなせるに匂も優りて見ゆ。かくて日白訪ひ鶯訪ひ野邊の草木も萌え出で、田舎の春は美を展開す。麥は曠野に浅翠を布きて郁々たり。空にさへづる雲雀は一翔すれば一轉し、一聲鳴けば一躍し、遂に白雲に入、り影を止めず。黄紅白紫とりどり天女の如き草々も胡蝶の輕き姿を自由の天地に遊ぶ様といづれも都にては得難き眺なり。

遠山の綠ひや増して田舎の夏は来る。綠野を縫ふ小川は愈々狭くなり、餌をあさる魚に水草の動かさる、はおかしきものなり。早苗どる少女の姿かひくしく田植歌の情趣は田舎の誇りなり。夜は螢の光いと涼し

く、川岸にさまよへば月清らかに銀波を漾はし、清風時に來りて暑さを忘る。河水は聲低く、或は高く、玉琴にも優る音調あり。やがて蟬の聲かまびすしく蛙鳴と和して田園囂々たり。暑さ愈々加りては村の鎮守の森は娛樂場と化す。老若男女打ち集ふて綠樹鬱蒼たる中に休息するなど、都市の公園などの遠く及ばざる所にして、一層の神々しさを覺ゆ。

秋は田舎の情趣最も深き時なり。満目の秋色清澄にして無限の詩趣あり。野邊を飾る野菊の愛らしく、稻は日毎に黃ばみて、一望千里黃金の波を打つ。絶景言ひ難く、平和の氣分は満野に溢る。かくて秋も半ばになれば農家は忙し。殊に俄に雨の降り来る時は最もうきものなり。されど忙しき勞働を終へ我家へ歸る時の感興實に言ひ難し。寂然たる黄昏を破る晩鐘の行方も知らず消ゆゆくを聞く時、彼等は神祕の感に打たれ、心ある人の胸には如何に高く波打つならん。錦に包まれたる村里に夕陽斜に射て輝ける景色は、田舎ならでは見る事能はず。冷氣蟲聲を閉じて秋老ひんとし、山野枯凋して小川の水涸るゝ、誠にあはれなり。

を安んす。軒近き簾に木枯吹きすさび、村雨の音するなど哀れの限りなり。寒月夜にわたらる時月光をふめばわれから心すがすがし。白鳥の綿毛の如き飛雪積りて一望千里銀世界なす光景は實に形容し難く、貧家の藁屋も富者の金殿玉樓もひとしく埋めらる。何ぞ人力の自然の前に力なき。こゝに田舎は貧者も思ふがまゝに自然の美を稱することを得て平和の裏に一生樂しむことを得るなり。

漫 歩

青山正郎

秋草にすだく虫に聞きはれて、ぶらり／＼と散歩する。

花の蔭に浮かれ廻る人達も、懷は苦しいと見えて、今年は如何して年を越したらと今から苦勞して居る人もあるとか。これが人間の人間たる故かも知れぬ。冷たい夜氣を胸一杯吸込んで吐き出すと、何だか血液までが淨化されるやうな氣がする。

月は淡く中天に懸つて居る。川面にはかすかな水のせゝらぎ。虫の音はぴつたりと止まる。三四歩行くと

また鳴き出した。吹く風も頗る冷たくあたる。工場の汽笛が静寂な宵闇を震はせた。鐵橋を汽車が行く。

「得んと欲せば先づ與へよ。」年々歲々社會に送出される學徒は多いが、彼等のうちで、果して幾人がよく其の大平原を乗り得るであらうか。無暗矢鱈に文化を高唱する御身自身に果して而らば文化を何事につけても實行せられつゝありやと尋ねられて、完全に「イエス」の一言を明言し得る人が幾人あるであらうか。天地の恵みは大きい。大自然に育まれた人間程真によく其眞價を發揮し得るものはない。日本固有の美風は地に墜ちたと嘆く人は、何を以て云ふのであるか。自分はさうは思はぬ。それは一時的に或ものに抱かれて其の影をかくして居るものである。一旦事ある時に於ては必ず其の眞面目は發揮されるものであると思ふ。大日本帝國の基礎は未だ貧乏搖ぎもせぬ。大和魂は時に際してこそよく出づるものである。

こんなことを考へながら何時の間にやら踏切まで來た。暗黒の夜にレールばかりが光つてゐる。彼方の驛には唯一つ小さい信號燈が青い光を放つてゐた。

寂しき町より

W.

E.

○——さん。

この小つぽけな田舎町へ戻つて来てからもう數日になります。私は五年の間知る人とは一人もない旅に暮して居て、さればどこの故郷を戀ひしたうたでせう私は毎日々々早く故郷へ歸りたいと思つて居ました。私は全く戀人のやうにしたうたでした。

然し歸つて見ると思つて居た程樂しい處ではありません。それに近頃は何だか物寂しい心持さへするやうになりました。

○——さん。

此頃は毎夜裏の田圃で、寂しい聲をたてゝ夜通し蛙がなきます。深夜フト醒めて此聲を聞くと、たまらなく寂しさを覺ゆるのです。

蛙つて何の爲にこの世に產れ來たのだらう？ あゝしてする事もなしに毎夜鳴き明して、身にしみる秋風の立ち初める頃になると又土に歸るのだ……鳴くために産れて來たのだらうか。

私は蛙を可愛さうに思ひます。そして静かに自分の行く末を考へたりする事もあります。

○——さん。
赤い夕陽が鈍い光を此の風の暴れ狂ふ白い町を物哀れに照す頃になると、でも風はすこし靜かになるやうな氣持がします。そして町の中の商店の陳列棚の板硝子が物寂しく光り出します、間もなく薄赤い燈が夢のやうに點ります。

風の全く静まつた頃に町の中を散歩すると、埃で眞白になつた店を小僧がせつせと掃除をして居る様を見付けたりします。實際此頃の風にはどこの家でも掃除に弱つてゐます。

○——さん。

此町は寂しいけれども幼い頃から育つた處なので私には物懷しいところがあります。たまには泣きたくなる程悲しくなる事もあります。寂しい影の様な私は此の小つぽけな町で終生を送る積です。

もう旅はしませまい。

○さんくだらない事ばかり書きました。御許下さい今日はこれで失禮致しますどうぞ御自愛下さい。

木川君の死を悼む

天方健一

暗くなつて方々に電燈がぼんやりとついた。私は忘れられない七月十五日の寂しい彦根の町を力無く歩いた。それは私一人だけが通行人かのやうに見られた。親友を失つた私の胸の中は何物か押しつまつた様に一ぱいであつた。本當に力なく頭低れて歸つた顔を見た時、母はどんなに驚いた事だらう。夕食は一口ものどを通らない。佛壇の前に坐つた私は細い線香から立ち昇る青い煙を見詰めた。木川君！木川君！矢張君は死んだのか。獨で唯獨で寂しく逝つたのか。友の死が疑はしくなつた。夢だらう。夢であれと願つた。

事だつた。悲惨だつた。決して面白くはなかつたらう彼の未來は樂しくあるのが當然だ。——彼は天國へ上つてゐるのではないか。
其翌日は朝から曇り勝の空模様だつた。夕方からそれは丁度彼の骸が煙となつて天へ上る頃から静かな雨が蕭々と降りしきつた。
あゝ空は廣い。雲が漠々とはてしなく閉ぢてゐる。あゝ。

地藏詣の道行

富田忠之

歴史は速く三百年の、譽は高き三河武士、英傑の勳とこしへに、輝く伊井の城山の、時打つ鐘を後にして求むる跡の佐和山は、石田の如く荒れ果てゝ、辨財天の大洞や、小舟漂ふ入江潟、潟に濡れて見ゆわかず。鳥居のもとに打ちかけて、見れば聳ゆる磨針の、峠は高し孝子の傳。鶯宿る梅ヶ原、稻穂の實る米原や、天の河原をすぎゆけば、はるかに連なる、長濱の、灯うつす琵琶の湖、魚、樹に上る竹生島、かすんで見ゆる西國の、御札所の有難き。恨は盡きぬ小谷山、あさる

「木川君、これ君のか。」「さうだ。」汀に打ち捨てゝある麥藁帽を手にして尋ねた時彼はさう答へた。それこそ彼と交した最後の會話だつたのだ。そして又彼が此の世に残した最後の言葉だつたに違ひない。彼は怪しい船を追はんと抜手をきつた。——とめたら好かつた。——いやそれは愚痴だ。愚痴でもよい。あの時止めたら好かつたのだ。止めたら好かつたのだ。殘念な事をした。彼はあのついさきまで元氣だつたではないか。笑ひ興じて水に潜つてゐたではないか。それがあんなになつてしまつた。嗚呼前世からの約束があつたか。さうかも知れぬ。今日學校で富士登山行きを約束したが——さうだ、彼は私の居る所で死ぬべき運命を持つてゐたのかも知れぬ。

芳しい香が躰中に沁み込んで、もう私の魂は天國にある。オ、木川君其處に居るのか。はらい氣持の好い處だね。御達者か。

眼を開けた。其處は矢張り佛壇の前だつた。悲しい處だつた。

幼なくして母に別れ、又先年父を失ひ、病を得て一年休學し、東京に出て震災に會つた彼の短い一生は多

註

石田、戦のため田畠の荒れ果てた事。

註

石田三成を指す——佐和山城主

鳥居のもの、鳥居の下。鳥居本(地名)

磨針の峠、地名、此の所で針を磨いたと云ふ。

梅ヶ原、地名、

米原、地名、

天の河、地名——米原の北方に在り。

長き濱、長濱(地名)

竹生島、竹生島(地名)

琵琶湖中(地名)

魚木に上る——綠樹影沈魚上木、清波月落兔奔浪

建長寺僧自休、竹生島詩。

小谷山、地名——東淺井郡に在り。

あさるの水、浅い井の水。淺井長政 小谷山の城主

元龜元年信長に姉川に敗らる。

姉と妹の河、姉川と妹川との二流。平常には殆んど水無し。)

たいこう、大功、豊大閣。

虎の如、姫御前、虎姫——地名、姉川の北にあり。はやみす、早き水、時の流るゝ形容。速水——地名。たかすき、高き月、夜漸く深きを表す。地名——高月渡岸寺、秀吉の部下の七人の槍の名手。賤ヶ岳合七本槍、戰の時大功を現す。

木之本、廷命地藏、國寶、——信者甚だ多し。

『鮮人の死ご私』

中 正男

それは汽車通學の頃であつた。

長濱から彦根迄の汽車通學の間——僅一年許りだつた——私は可成いろんな事を聞き、そして私として珍らしい事實を知つた。けれどこの事位私に生々しい印象を残してくれた事はない。私はそれを一生忘れるこ

焦慮と憤懣とを感じた。

米原はこの二三年前頃から山を削つてその土砂を以て湖水を埋立して居た。そしてその仕事はすべて鮮人によつてせられて居た。爆薬で山の一角をくずしてその土砂を所謂トロッコと云ふ奴でがらぐら三四間勢よく押してヒヨイとそのトロッコへ乗つて見て居ても氣持の好い速力でレールの上を滑つて行く。夏の炎天の下の労働のため赫黒く日やけした頑丈な彼等はそれを連んで行つては埋立て、行く。素裸のヘラキユレスの様な筋肉をした鮮人はその上役の者らしい日本人から監視されて黙々として働いて居る。

私はそれを車窓から眺めることが度々あつた。車中の人们にも彼等の働いて居るのを眺めて同席の者などに話しあう。

「どうです鮮人の多いことは」

「そうですなア、隨分居ますね、皆この邊に住んで居るんでしようか知ら」

「そうです米原のあたりに住んでるんですがどうも鮮人なんて汚くるしい奴ばかりでね」

「そうでしやう！ どうせ鮮人ですもの」

とがないだらう——

琵琶湖に沿ふ田圃の景色はそば近く迫る伊吹——それにつゞく山々で一種の暗さがあつた。併し夏の景色は頗る「生」の力で漲つて居る。力強く氣味よい赫色の伊吹の山は絹張りの天蓋の下に男性的なそり切つた断崖を見せて空曠く様に立ち聳ひて居る。田園のひるびる平野は甘いのどけさが漂つて居る様だ。そして絶にすうそくと吹いて来る湖水の風は新鮮な冷い澄み切つた輕さで田園から森へ森から山々へと流れを行く長濱附近の純朴な野原！ そこには不斷の清新さと「生」の歡喜の溢れて居るのが眺められる。しかし汽車が進んで米原へ來たならばそこには近代的？ な嚴しいステーションが醜く煤けて晴れ切つた大自然の空の下に灰色の屋根をまるで病者の蒼ざめた肌の様に曝して居るでは無いか!!

そしてそのあたりの田園の感じは何だか矛盾した、そぐはない氣がする。山は削られて腹をむぐられた様に赤黒い、爆薬で開拓せられたあとが見ゆる。

あゝ此處にも時代の風が流れてこうして自然の快い眺めも汚されて行くのか！ と思ふと私はある惱みどして居るでは無いか!!

「皆あれで朝鮮へ歸るときは金を相當に貯めて行くんですけどね、何、内地人から見れば大して成功した方と云へない位の金を持って行くんですが先方へ行くと物價が安い故か一角の紳士に成つてかへるつてな事ですよ。そして内地へ來ない鮮人は一人前でないと先方では云つて居るらしいですね、何でも日本へ日に日に入り込む鮮人は何百人と云ふんですから怖しいもんですよ」

「だが、大層ひどひ仕事をやつてますね」

「ね、あいつ等はどんなに働いたつてびくともしない位の體力はあるんですけど唯怠るものですからあゝやつて監視人が居て見張つて居ないと駄目なんですね」

「要するに追ひ使ふんですね」

「ね、そうです馬か牛の様にねへ、へ、そらしなきやア駄目なんですかね、先祖傳來の怠慢性なんだから困つたもんですな」

そんな對話を聞いて、私はその人の云つたのを微笑んで「そうだ」と思ひながら聞く、——先祖傳來の怠慢——その通りだ。彼等はその傳統的病の爲にどんなに虐げられて居ることか！ その爲に彼等の國は有史

以來完全な獨立國として立つたことがあるか！ おゝ
鮮人達よ！ 君達は永遠に奴隸的亡命の國であつては
ならない——少くとも日本と合併したからには魂の蘇
生を計らねばなるまい！ そして我等アジア主義の旗
印の下に大東洋の建設への第一歩を踏み出さねばなる
まい！ と考へるのである。

或る朝である北陸線から米原驛で東海道線へ乗りか
へる爲に一度下車して本線の來るのを二十分許りの間
待たねばならなかつた。で私は待合室へ這入つた。二
等待合室には誰も居ないので新聞を見に這入つた。そ
してそこで四五分読みついけて居たと思ふ！ すると
表の方が騒がしくなつて、たゞならない叫びやうめき
が聞こえて來た。

「何だ！」 「喧嘩だらうか！」 と私は直覺的に考へ
ながら外へ飛び出した。するとどうだらう！ 一人の
汚くよごれた白衣の鮮人が一人の日本人に頑丈なステ
ッキ（ステッキと云ふよりか丸太だ）でなくらで醜く
顔をゆがめて何か叫びながら遁れ様とする。日本人は
土方の親分態のあまり品のよい方でない如何にも殘忍
さうな唇が大きくて赤く、太い歯が牙の様にむき出し

ある——職工、鐵道員、會社員、——の連中がワーッ
と一齊に喚き出した。

「やつちまへ生意氣だ」

「この豚野郎！」

「殴れつ！」

「殺せつ！」

と口々に叫んで唯一人の鮮人をとりかこんで拳骨、
ステッキや棒、石片等のもので散々なぐつてなぐつて
なぐりぬくのであつた。あまりに痛々しい光景なので
私は待合室の中へ這つてとらろく胸を靜めて息をこら
して眺めて居た。巡查が走つて來た。がとでもその廿
人程の荒くれた氣のたつて居る人々を制することは
出来なかつた。巡查は懸命になつてその眞中の鮮人の
居る間へくいり込んで行つた。きつといくつも鮮人の代
りに拳骨ステッキで痛い目にあつたのであらう——
「止めんか！ コラツ止めツ」
と叫ぶ巡查の聲も一種の病的などりのぼせた人の叫
ぶ聲であつた。だが人々を制すことはやつて出來た。
そこへ又も一人頑丈な巡查が急いで走つて來た。

「どうした／＼」

て憤怒の唸りを上げてピシリ！ と鮮人を殴打して居
た。

だん／＼人は集つて來た。そして物珍らしげにその
有様を見て居るのだつた。

「おい逃つたつて駄目だせ！ この野郎さア來い！
來いつたら來い！ 畜生ツ」

と散々打のめしてもう鮮人の動かなくなつて倒れた
のを見ると威丈高に其の土方態の男は云つた。そして
彼は鮮人の胸倉をつかんでグツと引きびり起してビン
ヤリ！ と横つ面をはり飛した。

「うーつ！」

と鮮人は目を白黒させて苦しんで居たが突然その男
の兩足にからみついてドタリ！ と投げ飛した。そし
てフラン／＼と起上つた土方態の男はスッカリ怒つて「
この野郎ツ！」と鮮人の頸のあたりを拳骨で殴つた。

鮮人も今迄は逃避的であつたが——彼は決然假面をぬ
いだ獅子の様に太い腕で日本人を力まかせに大地の上
にたゝきつけた。と見ると今迄見物して居た日本人で
にたゝきつけた。と見ると今迄見物して居た日本人で

とその大きな巡查は叫んだ。先刻の巡查は鮮人の身
體を調べて居たが

「おいこゝに居るものはどこへも行くことはならん
！ 逃げでもしたらば大變な目に會ふせ——おい君そ
こらに立つて居るものを集めてくれ給へ……」

と同僚に云つた。

「おい集れ！ 貴様もやつたんだらう、何、違う！
まあこゝに立つてろ。辯解は後だ／＼そこへ立つてろ」
と口喧しく宣告して待合の中に居た私達五六人の者
も立會人として巡查の傍によびつけられた。私は迷惑
に思つてその巡查に

「僕は登校せねば成りませんから御用なら歸りにで
もして下さいませんか！ お名前と住所はお知らせし
て置きますが」

と云つた。頑丈な彼の巡查は私をジロ／＼眺めて居

たがウンと大きく領いて

「あゝ宜いとも學校へ行きたまへ」

私は學校へ行つてからもあの出來ごとが氣にかゝつ
ねなかつた。

私は學校へ行つてからもあの出來ごとが氣にかゝつ
ねなかつた。

てしんみり課業を受けることが出来なかつた。あの鮮人はどうしたであらう——何か悪いことをしたので、あゝやつて内地人に苦しめられて居たのぢらうが——一體あれからどうなつたらう！ といろ／＼と考へてゐた。

其の日の夕暮れ歸りの汽車——米原で十分間停車の折りに下車してあの事件のあつた驛の表へ行つて見たが、朝の事件を語るべき何物もなく、待合には多くの人々が各自の乗るべき汽車を待つて居た。が——フトそこへ朝、私を快よく放つてくれた逞しい大きな男の巡査がやつて來た。彼も私の顔を見覺ねて居るらしかつた。一寸微笑んだ。私は一寸頭を軽く下げた。

「あの鮮人はどうなりました」
と私は聞いた。

「死んだ……」
と巡査は云つた。

「わゝ死にましたか！ 矢張り悪いことでも仕たんですか……」

「あゝ」
と巡査は一寸惱しげに答へた。私は矢張り十分間の

繋き合つて一緒に此の大地上に人間相愛の不滅の殿堂を築うではないか！

私は今朝の鮮人の顔が忘れられない。あの土方態の男も忘れられない。今日の此の事件を絲をたぐる様に以前からのことを考へて見ると、要するに鮮人は傳統的な彼の怠惰性と目醒ない彼の無智とからで、毆つた人々は彼等の無理解と狹量な人種差別心から起つたのである。

東洋のためにも！ 此ななことがこれからつゞいたならばざんに不幸なことであらう。我々は少くとも廿世紀の人間である。理解がなくてはならない。それには無智であつたり狹量であつてはならない。我々は寛大であり。抱括性の大きい世界人でなくてはならないのだ。

長濱につく頃にはもうあの夕陽も姿を彼方の地平に隠して仕舞つてたゞ青く澄んだ空に淡い紅がホンノリと漂つて居る。そしてひた／＼と湖水から微風が流れ来て西の大地の涯から青白い靄が漸々と大地に迫り掩つて来る。

あゝ星も輝いてまたゝき始めた。

自然の美——それは愛だ。
自然是此うして我々を慈んでくれるのである。

私は自由に大きい——無限に、無窮に！

「我々は地上に放たれた自由人だ。そして我々は愛し合はねばならない者達だ。そこには平等と理解ある自由がある」
と私は考へた。

『呻　き』

中　正　男

私は叫ばんとするのではない。
私は苦しい呻を上げて居るのだ！

私はいままだベザロフニストの域に在いて眞理の微光に異端の白眼を以て眺むるの徒だ。私はそれを悲しむけれど濁流の中に浮つ沈つする私の今の状態はどうにも出来ない——

あゝ呪はしくなる一つの影よ！

私は矢張り異端者だ！ 一つの影に呪咀の呻を上ぐ弱い人道主義者である。私はこゝに一編のこの異端者の呻を辛じて親しき若人の群に見えたのである。

僅な間でもこゝへ来て見たのがよかつたのを嬉しく思つた。早速列車へ歸つた。

——矢張り死んだのだつた！ そしてあの土方態の男はどうなつたらう。あの多勢の殴打者も。

と私は無心に窓から眼を田園の方へ放つて想をつづけた。

夏の夕暮！ 豪壯な赤い團塊の太陽は西の一面赫い空にかゝつて漸々と彼方の地平の果に沈まうとして居る。湖水は青い波をゆら／＼と搖らせて居る。そして比良の山波の半身は金赤色に輝いて繪に見るノールエアたりのショールドの夕景を思はせる。沈んだ静だ。微風もない。たゞ繪の様な落着いた平な光景である。私は又新らしく考へさせられて來る。

此の大自然の空氣の中にある痛々しい朝の様な事件が此の世界で一日の中にどれ位起つて居るであらう！ と。あゝ！ 地上の醜さよ。そこには惡と善が血みどろになつて戦かつて居るではないか！ そこに虚無の暗黒と創造の光が明滅して居るではないか！ 人間よ！ 人間よ！ 我々は永遠に人間の地上。人間の地球たらん事を願つて居るのではないか。しかば我々は手を

おゝ異端者よ！
汝は常に呪はるゝものよ。

——そうだ！俺は呪はれ——そして憎まれる一個の男である。私は常に呪ふ一つの影がある。それは何だ！それは人間のあらゆる反逆性、向上性、理想的熱血精神をスッボリと掩つて手も足も出なくさせる奴だ！

傳統的因襲と云ふ奴さ!!

こいつが俺の自由さと反逆性と熱血的精神とをスッカリ奪つて俺を潮流の中に浮沈の苦悩をさせて居る野郎だ。

けれど敢て云ふ俺がアイコノクラシズム者であつて社會主義者でない云ふことを。

俺は呻く——そして呪ふ

世間の奴等の「靈魂」を！

奴等は頑迷な道學先生たるに過ぎない。

過去をよろこび現實の否定者たる舊道學者の頑迷は度すべからずだ——奴等は禁慾とか克己とか清貧とか吐して仙人のつもりで居るたわけだ。そして彼等は本能を忌む人間らしくない人間だ「世の無情を感じ」と

決して俺は叫ばんとするのではない。

俺は弱い人道主義者である。

見ろ！俺の現在を——

俺は半分泣いて居る呪はれたる人間の悲惨な現状

「中正男」と云ふ異端者だ！

俺をこんなにとぢこめて悲惨な呻を上げさせるあの一つの影よ——俺は今呻いて居なければならない。そして濁流渦巻く中に居なければならぬのだ——。

けれど俺の親しき新人よ！

——俺の腕に、胸に、強い血液が
再び勇しい自由性に目醒め始めた様だ。
自信がよみがへりかけた。

おゝ俺よ！

親き多くの新人よ!!!

我々起つて新人間世界の建設へ勇しい一步を踏み出
さうではないか！

友よ！

か云つて山にかくれて生きる。
馬鹿よ！たわけよ！

何様世をはかなんだなら直ぐに死なんのだ。おい！傳統的因襲の素敵な好愛者の君達よ、世の無情を感じても生きて山の中に居たいだらうが！それだそれが——生きたい——と云ふのが人間らしい人間性即ち本能だ。本能と云へば獸的な欲求を思ふ様な道學先生よ！俺は冷に笑ふ

俺達は「人間」であることを忘れるな！天より恵まれて存在する人間である。人間は人間らしい生き方と人間の多數の幸福たる生活をすればいいんだ。神にならう！佛にならう！なんぞと云ふつまらん野心を起しては不可ん！天は人間、獸、蟲、草木それべく別個の性情のものを作つたのだ。そして死ねばみんな泡沫のごとくなつて萬物一に歸するんだ。生きて居る間は人間は人間、獸は獸それでいいんだ。そこに人間は人間らしい生命の愛を感じて来るんだ！

神の様にならう——と云つて現實のすべてを穢土なりとする様な御仁は共に俺とたるべからずだ！

あゝ併しそれは俺の呻だ！

月 下 の 悲 哀

辻 孫四郎

露滋き秋の夜、細り行く虫の音のコロ／＼と秋の深さを語る山道を轉つてある石を踏み越ぬふみ越ぬて一岩頭に立つた。仰げば蒼空高く擴がつて、さやかな月一つ鏡の様に照り渡り、見渡せば遙に霞んで墨繪の様な景色が前方に浮んで居る大自然に接すると晝間でも夜十時頃インスピレーションを覺ゆるのに、ましてや此處防波堤の邊りに杖を引いて身にしむ秋風を受け絶えない波音より聞ゆる天地靜寂な此の邊に立つたのであるから自分の胸の中に天來の聲の響かぬ道理があらうかどうつと押寄せせる波頭、ばつと岩に碎けてキラリと輝くしぶき、すごい程である。

やがて青白い月の光を全身に浴びながら深い思ひに沈んで行つた。晝は動で夜は静である。太陽は無限の希望の象徴であつて月は物の歸すべき永遠の姿を示してゐる。然して人すべての人は誰しも欲の網が腰に付いて居て、心の中の煩惱の大は追へども去らぬ。されば一日を無限の希望に引きすり廻されて争鬭して來た人も静かに月に向つて獨り立てば、あらゆる動搖は影

を潜めて唯永遠の光をのみ見る。淋しい中にも慕はしみがあり、悲しい中にも喜びがある。淋しさは永遠と云ふものに對する不用意な心の空虚を示し、慕しさ喜ばしさは欲の綱の弛んだ開放の自由から起る平和の樂しさである。迷ひや悩みに苦しんで居る者に取つて唯永遠の月に對しては人類無限の煩惱を訴へるばかりで隈なく澄んでゐる月の様な何の隠りも無い心になれたなら何と云ふ幸福な事であらう。荒れ狂ふ嵐の中にも少しも煩される事なく天空無心に照つてゐる月を見る

と、いつも古に心を馳らす釋迦は煩を斷つて無我無念の境界に到着する事を教へた。誠に人生究竟の樂園は

我が一念を忘却し、人生を超越した無念の界にある。

月の光は永遠の姿を示して居る。太陽の光は何處迄も進め、何處迄も造れ、前途に無限の光明があると語つて居るが月の光は總て一時の假の姿で不増不減だと語つてゐる。草木も目を覺し花を開き實を結び、春夏秋冬を経て又翌年同じ事を繰り返す人間でも或は生れ或は死しかくて歴史を繰返して居る。かくあるが此の世の姿である。しかし月はそんな事には頓着しない、彼は宇宙の詩人である。晝の戰鬪に疲れ惱んだ人に對し

て永遠の慰藉を與へ晝の煩惱生活に隨落して宇頂天になつた人の心を鎮めて物の哀れを思はせる萬物は一時の幻に過ぎず、總て目先の騙かしで遂げた慾望は直ぐ奪はれてしまふ。會ふは別れの初めであると云ふ事をつく／＼と思はせる。萬里を寄せる波の音は絶らずドウツと岩に碎け、バラ／＼と銀の玉を水に散らす。だまつて見て居ると醉ふ様な心持になつて身も心も青白い月の中に溶け込んで行く。

素 描

北川壽三

堤の上に蹲んでマントの襟の間から見ると、堤、黍畑の作、電柱、丘、山脈のふくれ目、ちぎれ雲——其の一面は同じ様に赤く燃り、他の一面は穴の底の様な濃い陰影の中に没して居る。——が見れる。堤の上には所々に真黒な斑らがある。烟へ仕事に來た百姓が休みの時に野火をつけた跡だ。麥の芽は黒い土塊をはぢいて首を出して居る。

電柱はひつきりなしに唸つて居る。電線に風のある音響だ。丘の桑畑に點在する人家の白壁が閃光を斜めに射して居る。

めに遠く放つて居る。山脈のひだ／＼の深い奥行きの面に雪がしみの様に囁りついて居る空には絶えずちぎれ雲が走つて居る。泥の様な雲で、縁が金属性の輝きだ。

風が枯れ草や畑の上を陰森な歩みを續けて行くかかるな殆んど聞き取れぬ程のうそぶきを以て。かくして彼の聽覺は鋭角三角形の頂點を益々高めなければならぬ。

『があ！ があ！』

何處かで鶲が低く鳴く。時たま畑や堤から飛び立つのが見ゆるが別に高くは上らない。視るこ、遠い田の上に肥料でも散らかした様に真黒な點が出て來た。尙よく視ると一羽一羽チヨツ／＼と動きながら、全部の中心が移動して居る。

高い／＼ガラス性の透明な青空に、小さいインキのしみを思はせる椋鳥の群が見ゆ出すと、急に一羽の鶲が下から覗き込む様な陽光に羽を閃めかして飛び立つた。そしてけたゞましく鳴いた。と、一羽、二羽、一時に幾十羽の群がバアーと嵐の様な羽音をたてゝ飛び上つた。

が、椋鳥の群は遠く高く昇つて行つた。鶲は氣ぬけがした様に各々啖き乍ら、幾十羽づゝかに分れて變な弧をゑがいて田圃の上に下りた。時々聲を立てるが居るか居ないか分らない位静かだ。マントの襟から冷たい土の呼吸が私には感じられて來た。然し凝乎として私は動かうともしない。

日がざ／＼とした山の突角から落ち込んで行つた野は黒い蛇の舌になめられた。山脈の頂きと雲の縁丈を残して光りは遠く逃れ去つた。ぬらくした暗は山の裾からも頂きを目がけて追ひまくつて行く。

一羽、二羽、五羽、六羽、と群から離れた鳥が時々飛び出す。そして南方の最も近い山地の方へ震へた羽音を残して飛んで行く。遠く／＼小さい點になつて遂には山脈の裾に渦巻く暗に吸はれて行く。

山脈の頂きの光りも消わた。空には薄い幕が止め度なくふり蒔かれる。黒い點もいつの間にか殆んど見えない程數が減じた。が何處からか呪はしい鳴き聲が風のうそぶきにもつれ乍ら傳つて来る。然かしそれも穴の底に餘韻を残して沈んだ。

がつ／＼歯をふるはせて暗はしがみついて來た。霜

融けのした土が又凍り出した。川の氷のはりつめる音が張り切つた鉄板を細い小刀でけづる時のやうにかすかな音響をたてる。

風が最後に喘ぎを止めて死んだ。

もう完全に夜だ。寒さは容赦なく地の底からこみ上げて来る。かくて私は黒いマントをかき寄せ、帽子の庇をまぶかに、動き出さねばならなかつた。土の崩れる音が彼の足音から一つ／＼生れ出て來た。

月 の 夜

田 中 謙 三

私はザク／＼砂をふみながら歩いた。ほんとにいゝ月だ。磯の岬が淡く暗黒の海上に浮んで居る。キラキラと青味がゝつた月光は海の上に輝き小波にはこぼれて末は段々細く、目の前の黒い二つ三つの岩に銀色のしぶきとなつて散つて居る。私は小石を拾つたそしてそれを投げやうか元の所におこうかと思案した。が私は投げたならば小石が黒い深い海の中に無氣味な音と共に沈んで行くそれは丁度人間が深く／＼墮落の底に沈んで行つて再び起き上る事が出來ず、尊い一生を

いよく／＼浮いて來る。向ふの山裾の露がしづ／＼と押し寄せて來る様なけはいに私はかうしたシーンを惜みながら月を仰いで淋／＼い心持で歩をうつした。

地 藏 盆

大 久 保 真 順

地藏堂は私の村から二町許離れた山中にあつて地藏盆は私の村の中行事の一に數へられ、又村内の老若男女はわざりて一夜の歡樂を此の境地に見出すのである。其は毎年八月二十三日の晩、即ち昨夜であつた村人は平生より早く夕餉を認めて此の一宇の堂前に集ふのである。早くから燈明は點じられ、香煙は縷々としてのぼり、其の匂は四邊に漲てゐる。「本尊地藏大菩薩」と筆太く書かれた一對の提灯は赫々と輝いて翁嫗は前に堆隠つてゐる。子供等は嬉々として暗の中に出来没して騒ぎ立てゝゐる。聽て讀經が始まり、さしもの騒がしかつた子供等も今は健氣にも静かに讀經の了のを待つてゐる。暫くして誦經も終り、佛前の供物は參詣者に順々に配られ、配り終ると盆踊が始まるのである。音頭取は勿論村の若衆である。そして村の

信仰も愛も、何の理想も無く一點の光明もない味きない世を送るのと同じだろうと思つた。こうした事を唯一氣に考へて見た後は耐へられない淋しさを感じた。

ザク／＼音がした。はつと思ふと小石は砂の上に落ちてしまつた。私は漸く苦しい責任から免れた様な氣持ち歩きました。ザク／＼歩く度に砂をふむ下駄の重々しい響は静かに海邊を圓く波紋をなして傳つて行く。横手の土堤を登つて新草の中に足を進めた。ひょろ高い夏草が夢の様に目先にちらついて居る、その細長い莖の間を透いて白く光つた細道がかすかに續いて家の横の方に消えてゆく。家は月の下に眠つた森の様に静かにひそまつて居る。青い露先の末端が地面にとゞくあたりは、一帯にぱつと明るくけぶつた様に見えて居る。私は倒れかゝつた夏草の莖をふみながら歩いて行つた。草にはもう夜露がすつかり降りて歩をうつす度毎に銀玉はキラ／＼光つて落ち光つては落ちして私の下駄をぬらしたきり立つた山には雜木が重り合つて生ひしげつてゐる月の光にうす黒味を帶びたその線が夜目にもぼつとして見ゆそれが山々を一ときは静かにした微風が吹いて來ると葉先はザワ／＼とゆれて月の光は

老も若きも共に踊り狂ふ。かくして更の闇けるのも打忘れて一夜の歡樂に没倒する。音頭取の聲は益々牙ね踊手は愈々其の妙を發し興は漸く佳境に入る。餘韻の嫋く遠寺の鐘の鳴る十二時頃には若きは老を顧み、親は子を呼び子は親を俟ち山坂を下つて歸途に就くのである。

生存競走は益々激烈を加へるが村人は殆ど桃源裡に住んでゐるかのやうに何等の變化も來さず、五十年乃至百年否より以上の昔からの仕來を奉じて八月二十三日の晩には必ず集ひ而して魂の身を離れたるもの忘れんばかり狂ひ廻り一夜の歡樂を肆にする。肩摩れ轂轢合ふ都市に居る人は殆ど想像も許されない位である。若し能く想像出來得たゞするならば必ずや田夫の和氣露々として生活してゐる状態を羨み、憚れ、且慕しく思ふであらう、かやうな事に野人の質朴さが覗はれ、爾汝を以て呼び應へする中にも都人士の美み、憚れ、慕はしく思ふ所があり、彼等が奈何に平和に安んじてゐるかの一端が見出されて、都市を慕ふ子女は少なく却つて土に親しんで、土を友としてせつせと土から物を得ようと働く其の有様は實に頼母しい。

私は之を日記の終の空白に書いて直ちに床に就き乍らも田舎の如何に平穏なるかを思つた。

早魃の所感

大久保真順

一望十里の青田も五十日に垂んとする旱天に農家の辛苦も何等の効果なく漸次赤色を呈し、加之飲料水の缺乏さへ來し、今は袖手唯天道の暴威を逞うするを傍観するのみである。

此處彼處に聞ける鉦、太鼓の音は百姓の切なる雨乞である。或人は非科學的だ、非文明だ、不合理だと言ふ。或は非文明、不合理かは知らないが決して科學を以てすべきものではない、彼等の科學を度外視して雨を祈る質朴な心はやがて神佛に應へて必ず雨の降るものと信じてゐる。

百日以上も世話した田が赤裸體になるとは彼等の言ふに忍びない悲痛である。恐らくは天の無情を恨み神は在さるものを考へるに相違ない。

峯にかかる斷雲を見ては雨を想ひ陰雲の日を掩ふては雨を乞ふ。其の情や實に隣むべきである。併し斷雲と同じ歩調になつて直ぐ私に

「君、一中ですか」

大きな息をしながら藪から棒の調子で尋ねられた。

「えゝ」

と私は答へた。私はその人をまだ見た事がない。恐らくその人も私を、知人は思つてゐなかつただらう。

「一中は大阪毎日の水泳大會に出場しましたか」

「いゝえ」

「ウム……私も一中がゐたら、隨分盡力しようと思つてゐたんだが、いくら探しても見當らなかつたものだから——」

私は此の時その人が我が校の先輩で、毎日新聞社に何か關係を持つ人だ、と思つた。

陰雲は以て僅かに彼等の心理に苟倣を得せしめる否徒に狂奔せしめるのみである。嗚呼天道は無慈悲か。

新聞紙は屢々雨を報じてゐるが依然として降らない水氣を要する草木は固よりあるが、あの札々厭ふべき蟬さへも聞れない。かくして天地は亡び去るのであらうか。筆を執る間にも遠近の鉦、太鼓は耳底に徹しだしきは龜裂をも生じてゐる。今は彼等は人事を盡して天命を待つのみである。其の前途實に解し難い。

(大正甲子年桂月望日)

未知の人

中川英一

九月になつたとは言へ、暑い陽が容赦なく輝いて身體は汗で潤ふてゐた。何時もの様に鞆を、肩に引掛けテテク〳〵と學校からの歸途についた。

どある一軒の氷屋の前を過ぎる時、門口に吊るされてある褪めた旗と、時々風で動く暖簾との間に私は二人の人を見付けた。一人は洋服姿で、注文した氷を待

つてゐるのか、或は喰つてしまつて一服でもしてゐるらしかつた。今一人は和服姿で氷を喰つてゐた。道の片方は濠を距てゝ高商とそのグラウンド、片方は桑畑の間にバラ〳〵家が建つてゐた。二十間程も行き過ぎた頃後の方にゴツ〳〵と音がするので、振り返つて見ると先刻氷屋に居た洋服姿の人が、帽子を片手に走つて來るのであつた。私の側迄來ると冠りながら、急に私と同じ歩調になつて直ぐ私に

「でも彦根は水泳が盛ですねエ」

「いゝ」

私は肯定する様な否定する様な返事をした。

「僕も中學時代には、海でよく泳いだが」とさも過去の追憶を懷しさうに言つた。二人はゆるやかに歩いてゐたが、私は「海」と言ふことばを意外に感じたので

「所で貴方は何中學の出身ですか」

「私は、私は神戸一中卒業で……」

それから二人は互に黙々として歩いてゐた。時々石工の石を割る響きが、二人の間を脱けて入道雲の裏へ消してしまふ。私は歩みながら考へた。先刻一中の爲に盡力したかつた、と云つたのは神戸一中の事だ。併し同じ一中ではあるが、彦根と神戸は見當違だのに、何故あの様な事を聞いたのだらう。やがて又

「君等は今日はじめて登校したのですか」

「いゝえ昨日からです」

「そう……所で高商は何時頃はじまるかね」

「確とは知らんが今月の中頃ださうです」

「實は僕の弟が此の學校へ今年、いや去年入學した

夜のつかひ

山口彌平

のです。で、私も度々此方へ遊びに來るのです。弟も何をしとるか知らんが、まだ東京に遊んでるが」話は再び途切れた。私は俯いてバツ／＼砂を踏む、靴の先を眺め乍ら歩いてゐた。と彼は「鐘紡」と獨語した。そして私は、弟もぬないのに遊びに來るとは、又鐘淵紡績會社にどんな用事があるのだらう。或は其處に勤めてゐる竹馬の友に、會ひに行くのかも知れぬが——等と不思議に思つた。

「矢張り彦根は田舎ですねエ」

と彼はさも、彼の弟の居ると言ふ彦根を嘲る様な口調で言つた。私は唯默然としてゐた。第一の角へ來た。彼は私と同じ様に左に折れた。第二の角へ來た。以前と同じ様に右に折れた。私は彼があても無く歩む如く思つた時、先程から彼は、不思議なことを何回か言つてゐたので、これが即ち探偵小説に出て來る謎の人ではなからうかと、淡い不審が心の中を暫し流れた。その中に二人は鐘淵紡績會社の前へ來た。と急に彼は

「さようなら」

と言つた。私も會釋した。私はその後を見凝めてゐた彼は悠々と門を這入つて行く。刺も通じないで——。と彼は悠々と門を這入つて行く。刺も通じないで——。

「もう何時かしらん。」

やがて遠い町の彼方から汽笛の音が微かに聞えて來たもう五時頃だらう。太陽も西の山に沈みかけた。一しきり吹來る風に黃金色の稻は大波、小波を打つ。何とも知れぬ良い感じだ。北の森影にバツと白煙が立上つた。ゴー／＼音勇ましく下り列車は出て來た。野を過ぎ山を越え見て居る間に鐵橋を渡り過ぎた。二三羽の鳥が驚いて立ち上つた。ビーツ汽笛は澄んだ秋の空氣を震はせた。白煙を残して汽車はトンネルの中に隠れてしまつた。其後の静けさ……たゞ用水池の水の落ちる音がどつとするばかりだ。手拭を姉さんかんむりにした二三人の村娘が、鍬や鋤をかついで、トンネルの上から下りて來た。僕は手近のよく實つた稻穂を一房取つて静かに歩み出した。くね／＼と曲つた畦道を通つてやがてトンネルの上に着いた。四方の村々あた

一足々々歩む我か下駄の音高く低く響きて、果ては森の影小山の裏に解け行く。犬の遠ぼえ長く韻をひきカサ／＼と鳴る。再び犬の遠ぼえ何處からともなく聞いて、木立の奥の怪しげなる鳴聲絹を裂くかと疑はるはて、何鳥の聲ならん。

細道過ぎて村に入る、賤が家の窓より漏る淡き火影闇は遠く續く。詩情こもりて淋しき夜哉。

人影一つ遙に見えて、其の影漸く近く、漸く大きくなり違ひて、闇に消行く。一軒家の前にたゞすめば中より人の話聲かすかに漏れて叔父の聲かと思はれる所々に離れ雲が綿の様に浮いて居る。

黄昏れ行く秋の村

山口彌平

僕は母の里の畦道に立つた。空は青々と、果知らず僕は砂の上に腰を下した。遠く續く川原の堤、うねりうねつて、果ては見ゆなくなつて居る。キツ／＼／＼とかん高い聲を立てゝ何鳥かと飛び去つた。

此ののんびりした村の景色。僕は無限の感にうたれた。

田に精出して働いて居た農夫も、我が家をしていそぎかけた。小鳥も自分のねぐらへと歸つて行く。村の家々からは、夕飯の仕度の煙が立ちかけた。僕は安めた身をそつと上げ、振向き／＼もと來た途を歩み出した。空は次第に紅に染まり行く。小山の柿の木にはたゞ一つ實がよく熟して今にも落ちさうに淋しく殘つて居る。





紀六

第五 學年 春季修學旅行記（瀬戸内海方面）

若林展二郎

五月十五日

午後五時音戸丸に乗船、大阪築港を出發した。朝來の雨も名残なく晴れて、夕日に照らされた歸帆の間を縫うて、汽船は静かな海面を滑べるやうに西へ西へと進んだ。一同は甲板に上りて、静かに没する太陽を見つめながら、早くも海の夕景に興をそゝられる。神戸港に着いた頃にはもう日はどつぶりと暮れて、街の灯が美しく海に映つてゐた。暫く上陸して港の町を彷彿たゞか遠い旅に出るやうな心許無さを感じた。再び船の人となつて、エンジンの音と共にぐんぐんと進む。

右に須磨明石の海岸の美しい灯、左にどんよりとした

十六日

船の一夜は無事に明けて、甲板には朝風が涼しくそよいでゐる。朝の海は気持ちがよい。暫くして太陽は

真ん中に乗り出した。流石の元氣者連も漸く疲れて、明日の風景を夢見ながら眠りに落ちて静まつた。エンジンの音のみが耳底に強く響く。

船尾の海面に雄然として現れ、金波船を追うて、鏡のやうな瀬戸内海は美しく照らし出された。變幻極まりない絶景は連續して眼前に展開せられ、甲板上の一同は朝食を取る暇も惜しい。午前九時尾ノ道に寄港。汚い町を歩いて見た。特種の港町の氣分が漂つてゐる。

瀬戸内海——嗚呼何といふ優しい、雅びた、氣持のよい海であらう。人の旅情を唆り遊意を煽り世界の人々の憧憬の中心となるのも當然である。大小無數の島嶼は其處此處散在して雲の波すら立たず、陸海と、海と嶋と迫つては開け、展けては逼るところ、眞に一幅有聲の畫と云ひたい。況して春の氣は海といはず山といはず秀麗の景を添へて更に趣味あり色彩あり、すべてを生動させてゐる。甲板のベンチよりこの絶景を眺める！何と愉快な旅行ではないか。カメラ黨が忙しさうに甲板を上つたり下りたりする。

十七日

午後四時半宮島に到着。潜水艇が二隻浮かんでゐた。滴るやうな翠鱗は海中の大華表を後から包んで前面の海に映つてゐる。嚴島神社に參拜してこの塵埃離れた境地の夕に彷彿と、明月は沖天にかゝりて幽趣眞に身に迫る。同九時静けさを破つて、汽笛と共にこの仙境を去る。

午過ぎ有名な音戸の瀬戸に来る。瀬戸の通路は僅かに數間で海潮殊に急、「船頭可愛いや音戸の瀬戸で一丈五尺の櫓がしはる。」とまで言はれてゐるが、我が音戸丸も呻吟數分にしてやつと通り抜けた。

汽船はもう三四回程も小さな港に寄つた。寄港する

淡路島を眺めて、船は今しも瀬戸内海に這入らうとしてゐる。空はすつかり晴れて、大きな月が皎々と我が物顔に海の世界を照らしてゐる。舷側の白波が月の光に消えて行く。甲板は海風で涼過ぎる程であるが、そぞろ情趣をそゝられて尚去らずに、甲板のベンチに腰掛けたるもの十數人。足立先生の快き詩吟が聞えて來る。

船底の三等室に戻つて來る。まともに立つことも出来ぬやうな大井の低い室であるが、此處は又別世界を現出してゐる。上野中學の生徒と相交つて、互に御得意の妙技を競うてゐる。應援歌が始まる。江州音頭となる伊勢音頭が出る。あらゆる十八番が互に演せられてゐたがお仕舞には兩校の先生達迄も引つ張り込んで無禮講の空騒ぎである。その間にもう船は播磨灘の真ん中に乗り出した。流石の元氣者連も漸く疲れて、明日の風景を夢見ながら眠りに落ちて静まつた。エンジンの音のみが耳底に強く響く。

午前八時別府港着。一行は隨意に附近の温泉勝地を探るべく開散した。龜川より蜿蜒として繪のやうな山道をぶらぶらと登つて、血の池地獄、竈地獄、海地獄等順々と足の疲れる迄登つて行く。いづれも地中に充満した蒸氣が血路を開いて爆發し、熱湯地に吹き上げ

湯氣濛々として半空に漂うてゐる。天下の奇觀、大地獄の光景である。再び別府に引返へして、附近の別府公園、躰躅園、山水園、八幡地獄等へと前面に風光明媚な豊後灣を控へた山間を逍遙した。夕方町營の不老泉に浴して一日散策の勞を癒し、一行元氣回復して午後八時汽船に乗り込んだ。船中で一同揃つて江州踊りの練習をやると、水夫や仲士連迄が覗いて珍らしがつて喜んでゐた。

十八日

午前七時伊豫高濱港着。途中三津の魚市場をのぞいて松山市に來り、市の中央に聳えてゐる松山城に登る我が彦根城より數段高くて、その展望亦頗る廣く、前面の海岸、周圍の田園等模糊として春霞の中に望むを得た。晝食後健脚家揃ひの一行は電車にも乗らず、三人の先生を取り圍んで四方山の話をしながら、春の野道をうねりうねつて道後まで歩いた。今日は初めて旅館に辿り着き、温泉に浴して蘇生の思ひがした。夜は美しく點燈せられた道後公園の別世界を散策して寝についた。温泉町は何時迄も宵である。

十九日

るものがあるばかりで如何とも出來ない。「この下が壇の浦であります。向ふのが那須の興市祈岩、あちらが菊王丸の墓であります。」と霧を望みながら聲ばかり聞へてくる。山は荒れに荒れて、洋傘さへも飛びさうである。一行は小さな茶店に憩ひ、冷たい辨當にありつて震へた。食後勇を鼓し、風雨を犯して山を降つたが、お蔭ですつかりづぶ濡れとなり、骨まで冷こんで、小さな電車に押込められた時は、誰の顔にも困却の色が表れて、實に慘めなものであつた。高松迄戻つて明善女學校——それは此の行で最も強い印象をこじめたところ——の好意で、一方ならぬ歓待を受け洋服を乾かすことが出来て一同やつと救はれた。若山先生の交渉の御蔭だ。雨の小止みとなつた頃、近くの栗林公園へ出かけたが、不用意にも雨具の用意のない者十數名もあつて、寄宿舍生の隨分粹な傘を拜借したが、一寸いがぐり頭の連中には不似合に感せられた。

公園は境域無慮十六萬坪、蔚鬱たる紫雲を懷にして結構雄大、布置巧妙、泉水のあやめ亦五月雨にそゝられてその色彩情趣實に海内無双の名園である。

起床午前三時半。目を擦りながら手拭を肩にして、

温泉場へ行くと、もうそこには瘤高い人聲がしてゐた静かな温泉町を抜けて高濱港から汽船で多度津に向つた。今日も海面は鏡の如く、白帆點綴して島の配置面白く、綠濃き四國の海岸を望みながら汽船は走つて行く間もなく今治沖の來島瀬戸に差かゝると、潮流頗る急で、舟行射るが如く壯快なことこの上ない。

午後三時多度津港着。琴平に向ふ。象頭山金毘羅大權現の在ます處にて、參詣者仲々多く、町は殷賑を極めてゐる。夕方權現に參拜したが、石段ばかり多くて容易に登り切れず、漸く社前につく頃には汗みどろになつた。聞けば中途で閉口して失敬したものも二三あるとか。公園及び賽道の土產品店を見物して宿に歸れる。

二十日

起きると激しい風雨である。一同の失望その極に達した。九時高松着、直に屋島に向ふ。雨の泥道を十八丁登るには相當骨が折れることだ、東照宮屋島神社に参拜して、案内人と共に古跡を尋ねたが、全山濃霧に包まれて、一寸の展望もきかず徒に愴然懷古の情切な

二十一日

神戸に寄港する頃、目を覺まさる。氣遣つてゐた雨も止んで、海上には數多の船が出てゐる。午前五時半大阪築港着。一行は此處で一時開散して三々五々大阪の街へ散らばつて行つた。終日雜沓に揉まれて午後六時歸校の途についた。風景ばかりを訪ねた旅行は夢の如くに過ぎ去つて、一週間振に慣れた床につく事になる。——さて今夜はどんな夢を結ぶことだらう——。

第四學年旅行日記

（寺脇太次郎
山田千里郎

五月十五日 金曜

雨繁く氣氛として朝夕仰止する金龜城は霞みて遠ざかりし感あり。

此の日午前七時四十二分の彦根驛發の列車にて大和旅行の第一步を踏み出しぬ。

窓外の景趣恰もフィルムの如く刻々變化して止まず雲に覆はれて熟睡せるが如き三上山は今尙百足虫の横はれる感あり。

草津の宿も今は昔の面貌なく、彼の有名ならし瀬田の唐橋さへ新造されたるは怨めし。恍惚として右に風景絶佳の湖岸、左に鈴鹿の連脈を眺むれば突然の闇約三分を経て濛々たる黒煙の渦巻ける中より屹立せる崔巍を見る。

間もなく京都驛に着す。奈良線に乗り換へ畏くも車中より伏見御陵、乃木神社を伏拜み、明治天皇の御威徳を仰ぎ、乃木將軍の精忠を讃す。列車は荒漠たる茶園の間を突進して宇治に着す。洋傘に幸うじて雨を凌ぎ宇治の町を彷徨し、宇治川の畔に達す。

水清く急湍逆りて雪を噴く坐ろに宇治川合戦の雄壯なる光景を想望し、自から手に汗を握りたり。この邊山水を兼ね形勢の勝を擾覽す。正一位離宮大神と示せる神社に參拜し人員點呼の後、黃檗宗の本山萬福寺に参詣したり。梵唄洩れ來りて釋尊の檀特山に於ける苦行の説法を聽聞せる感おこれり。

宇治發電所は規模宏大にして屋内異様の音發し物凄し、それより流れ出づる水大渦小渦を描きて人をして毛髪をたてしむ。

平等院管理の最勝寺に到り寺僧より鳳凰堂の説明を

幡宮に參拜す。

若草山は名の如く若草一面に生ひ茂り、僅かに、二三本の常綠木あるのみにて登るに難く降るに能く辻り某君の如き滑り込みの痛快なる笑話さへありたり。

是れより、規模宏敞、殿宇壯麗なる春日神社に詣づ鳥居、燈籠の多きこと僂指に暇なく。本堂は今普請中にて丹精の美又賞すべし。

一同解散して隨意に歸館す。途中神鹿に戯むるゝもあり、又公園内に逍遙するもあり。六時半夕飯を取り十時迄自由外出を許され、異郷に旅行の第一夜を楽しむ。

第二日の記 十六日 土曜

一同充分の睡眠も得ざるに四時過ぎより騒ぎ合ひ、早や洗面場を彷徨ふ者さへあり。

夜の明くるにつれ、邊り一面の霧を認め、今日の旅行を案ず。六時過ぎ朝食を終に「八時奈良驛に集合」を約して解散せり。一行八時には既に隊伍を整へ出發を待ちあぐるに、先生方は未だその影をだに見せ給わず、一同案じまいらせたるに、十五分程度、悠々出て來給へるを見て漸く心おちつるたり。時しも天晴れ

聞く。源三位頼政の墓に詣で……「登るべき便なき身は木の下に四位を拾ひて世を渡るかな」と詠みし古を追憶し、當時の彼が境遇を思ひ同情の念深し。

宇治川岸にて晝食し、尚勝景を賞しつゝ宇治驛に集合す。雨漸く霽れ、遠山一層鮮かにして始めて眞の旅行氣分を覺ゆたり。

一時五十五分宇治驛を發し三時過、奈良驛着、直ちに「さくや旅館」に達し此處に悉く荷物を托し、先づ旅館前の開化天皇の御陵に參拜、次いで猿澤池にて案内人の長たらしき口上に飽き、三々五々相伴へる神鹿に戯れつゝ、西國九番の札所南圓堂と五重塔に過ぎり帝室博物館に入り、古代の名所を見物し、併せて奈良内人の長たらしき口上に飽き、三々五々相伴へる神鹿に戯れつゝ、西國九番の札所南圓堂と五重塔に過ぎり帝室博物館に入り、古代の名所を見物し、併せて奈良王門の大藝術の繁盛を追想し東大寺へと導びかる。仁朝の大藝術の繁盛を追想し東大寺へと導びかる。仁王門の密迹、金剛二力士の説明中、東林先生の質問に對し、案内者の曖昧なる返答は一同をして噴飯せしむ大佛殿に入る。

本尊は金銅盧舍那佛の坐像にして壯大なるのみにて何等崇拜の念起らす、三月堂、二月堂の不思議話をし聞かされつゝ菅公の「此度は幣もどりあへず手向山紅葉の錦神の間に／＼」の獻詠を以て有名なる手向山八

て、絶好の旅行日和なり。

既に奈良驛を去り懷しき舊都は益々遠ざかり風雅なる五重塔、新綠萌ゆるが如き若草山依々相送るが如きものあるを感じ。故傍に下車し緩靖天皇の御陵を經て神武天皇の御陵に參拜す。白砂を踏んで進むうち自ら神々しき感湧き出で無意識に首垂れたり。約半道にして檀原神宮に詣る。これ實に三千年の昔皇祖神武天皇の即位の大禮を擧げさせられし檀原の官居の跡にして國家發洋の靈地なり各組別に神宮に參拜す。電車にて吉野に向ふ。急流あり岩に碎け飛沫玉となりて散り水流く風景甚だ良し。山道を登り一吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻ならりけり」といふ古歌を思ひつゝ口の千本中の千本とも覺しき數多の櫻樹の間を廻りて吉野神宮に詣で途中村上義光の墓を吊ひ南北朝時代に於ける彼の功績の大なるを謝す。辰巳館に達し暫時休憩の後名所舊跡を廻る。案内人の説明を聞きつゝ先づ旅館前の銅鳥居を潜り吉野朝官趾に至り天皇の御難難と足利氏の横暴とを追憶し悲憤の涙に咽びたり。藏王堂に至る。堂中のつゝじの柱を見其の真贋を疑ふ堂前に最後の御酒宴を催されし際惟幕を張られし樹な

りと傳ふる四本の櫻樹あり。後醍醐天皇の行宮の跡なる吉水神社に詣で社前の靜御前の舞塚を眺め、「吉野山峰の白雪踏み分けて入りにし人の跡ぞ悲しき」といふ歌を示せる立札を読み彼女の果敢き運命を憐みて大いに同情したり「花に寝てよしや吉野のよし水の枕の元に石走る音」といふ帝の御製の如く谷間より水音洩れ來れり、谷を渡り山腹の雄壯古雅なる如意輪寺に參詣し數多の寶物を拜觀す。説明者の繰返せる口調皆型の如く單調なり。寺の扉に刻める「かへらじとかねて思へばあづさ弓なき數に入る名をぞどむる」の歌新しく疑念を夾む者多し。後醍醐天皇の御陵に參拜す。各自自由に歸館の途につけり。他校の生徒と同館に投宿し夜更くる迄大いに騒ぎ合へり。

（吉田諦成）
名 煙 築 一

皐月十七日予等一行は一夜の夢を結びし吉野辰巳屋旅館にあり、六時起床、朝食に暇あり、ふらりと外に出づ。四方霞こめて、絶えて山を見す。冷氣強し、時去つて早や六時五十分解散出發隨意なり。所謂唐金鳥居前より約五町にして口千本に至る、又長峯の櫻あり

眞田父子（昌幸、幸村）の潜居の跡なり、これより坂路ます／＼けはしく高野の山氣掬すべし。溪流路傍を流れ蒼として崔嵬を噛み爲に目觸を一新す。千古の靈谷大師修行の當時その儘なり。山中よりもるゝ行者の念佛又聞くべし。腹背の奇峯妙味を添へて聳に立つ靈境の山氣掬すべし。これより溪谷にそひて行く事一里半にして椎出が里に至る。高野登山口これなり。路いよ／＼峻にして山徑ます／＼屈曲一神谷を渡るに及びて眸を俯觀すれば彌望鬱として紺青に彩色せられ、山溪相輝映する所、碧翠濃厚天下の靈山、雄然として目曉の間にあり、薺萱堂に至れば昔日のごとく燈火の輝くを見る、不具者の路傍に佇座して憐みを求むるあり。暫くにして潺緩たる溪流に架せる丹塗の橋を渡るこれを極樂橋といふ。不動坂をすぐれば名もいたいげる稚兒が瀧の清流競ひ流れ一橋此處に懸る。翠黛の美、細瀧の快、筆舌の及ぶどころにあらず。行くごと暫くにして清の不動あり、細瀧森間に囁き靈氣ますます深し、女人堂に着す、海拔二千尺高潔清淨なり、昔女人の登山を禁制せしもこの所より初まると聞く、此處より下れば波切不動堂あり、我等が宿房福智院に至

時に櫻花去つて連山翠簾の陽光に輝くを見る。夜來の山姿夢を結びていまだ覺めやらず、小徑岐出の地に筇を停め山房に視線を驅れば、雲樹山を埋め復た人煙の訪るるなく、但々竦然として氤氳に親し、宛然桃仙の境に入るが如し、口千本を過ぐれば一面山腹に接して靈佛の感を與へ、右手は幽谷に臨めり、大小山々の起伏するところ、雲絲縷々として消ゆく、時に櫻樹錯出の間より絲線の日光地を射る、再び村上義光の墓に詣づ、懷古の念涙を誘ふ。吉野神社に拜し古を追想す去つて新道をとり行く／＼蒼鬱たる吉野杉の美景を賞す、斯くして吉野電車停留所に着す、時に八時卅分。九時十七分再び車中の人となる、十一時卅分高野口に着す、天氣快晴、驛前葛城旅館にて晝食を喫し。いよいよ高野登山を決行す。正午を去る廿分なり歩行四町にして慈尊の渡にかかる、流れみどりを寫して水深く陽熱射して一入冷靜の感あり、歩すること町にして四社明神階下の慈尊院に至る、縊徒のすゝめにて院内拜觀、西國堂、弘法大師母公の靈殿、多寶之塔等を拜觀す、慈尊院を出で、高野山に向ふ、丹生川に架する丹生川橋を渡り、歩すこと數町にして善明稱院に至る

（高野登山を決行す。正午を去る廿分なり歩行四町にして慈尊の渡にかかる、流れみどりを寫して水深く陽熱射して一入冷靜の感あり、歩すること町にして四社明神階下の慈尊院に至る、縊徒のすゝめにて院内拜觀、西國堂、弘法大師母公の靈殿、多寶之塔等を拜觀す、慈尊院を出で、高野山に向ふ、丹生川に架する丹生川橋を渡り、歩すこと數町にして善明稱院に至る）

第四日（五月十八日）

起床六時本堂に讀經嚴修の聲あり。朝の清淨ますます加はり弘法の靈いますが如し、精進馳走の食事も済み一行は院を本陣として高野昔日の懐れを満さんとす先づ足を金剛峯寺に進む、こゝぞ真言宗の總本山にして金剛峯寺の名は弘法が一山に對して附せし名稱なる建物の宏大壯嚴なる事宛然淨土の門に入るが如し、内部を拜觀す、狩野元信の筆になる群鶴の大廣間、狩野探幽齋の筆になる梅の間、梅月流水を描げる柳の間、いづれも目を驚かすに足れり。聞く文綠四年關白豊臣秀次公京都聚樂邸より逐はれ來り薙髮して當寺に寓せしに福島左衛門等千餘騎を率ゐ來り、金剛峯寺を圍み五奉行の印書を示し、公誅戮の旨を告げしかば公沐浴して衣類を改め柳の間にて自裁せりと。東福寺玄隆は公の死に殉せし一人なり、彼等の腥風此の室にみなぎ

りし當時を追憶してはその劇的に悲壯なるを覺ゆるのみ、寺を去りて大門に向ふ。大門百里西に向つて通じ遙かに烟波を望めば目力窮まり淡嶺阿山青一髪斜陽の萬段天海紅なり、何ぞ其の山勢風光の豪壯なる正にこれ金剛峯寺の總門にして西方を望めばこゝより西下數丁の所に華表を建てたり。こゝより西望すれば群山低く脚下に在り、遙かに淡阿の海山眸中に入る、それより裝飾華美、結構善美、高雅精巧、建築天下に比なき金堂を拜觀し苅萱堂に向ふ、月に群雲花に風、意の儘にならぬこそ、浮世に住める衆生の習なれ、こゝぞ筑前の守護職加藤左工門重氏が俗界の無常を感じ世を捨て、潛かに當山に逃れ、草庵を結び念佛三昧讀經嚴修に暮せし古跡なりと聞く。重氏が妻千里哀れにも嬰兒を抱きて行脚の身となり、重氏が高野に潜むを聞き遙々尋ね來り。女人禁制の高野の麓に宿り、毒を仰いで去り行く悲劇は何の教訓を垂れたりしか、苅萱は愛着に墮せんことを恐れて途上に逢ひし石童丸にも敢て名乗らざりしといふ、熊谷直實敦盛を討つて後出家し念修佛行をなせし熊谷寺を去り。横笛戀死の悲劇を語る大圓院境内の瀧口入道の古跡を訪ふ。一の橋より

奥の院まで十八町道の兩側石塔幾千萬一種の墓地共進會の觀を呈す。忠長が母の爲めに建てし石塔は宏大目を驚かし。父母のしきりに戀し雉子の聲と書ける芭蕉の碑あり。赤塗の井伊家の墓は左側にあり、いと物なつかし、玉川の清流陰森の間に囁き橋を渡れば長者の萬燈貧者の一燈を點じたる燈籠あり、堂は廟の拜殿にして其の燈火の光は古來絶らず、堂裏にまわれば大師の廟あり、寶形造の瑞籬をめぐらす。此處ぞ萬人の渴仰する高潔清淨の靈地なる。

承和元年九月一日大師弘法自ら點定し置き給ひたる淨土にして同二年三月二十一日結跏趺坐大日の定印を結び巣然として入定し玉ふや、閉目言語なきのみ、自餘は一切生身の如し。即ち梵本陀羅尼を納めて此靈廟に奉安せるもの爾來一千百餘年年々歲々數十萬人皆大師を渴仰して登山す。こゝより福智院に歸る時に十一時なり。下山の途につく、二時高野口を出發す、山體すでに雲烟模湖の中に入り汽車は紀水を渡りて和歌山驛頭に停る、一行は電車にて紀三井寺に向ふ、紀三井寺は二番の札所にして風景頗る佳なり。去つて和歌の浦に向ふ、雲脚ひくゝ細波岸邊を洗ふ。人寰に營々たるの士寸暇を偷んで此處に長嘸せば大自然はその靈に生命の源泉を注がん、宿に至る。

五月十九日 月曜 青山正次

旅行中は誰も皆氣の張れる故か昨日までの疲勞をもうち忘れ六時起床といふに五時半頃には皆起き出づ。七時半和歌山市驛に集合このことにて自由解散。和歌山城址はさすが御三家の一つなる紀州公の居址、その規模我が彦根城の及ばざるや遠し。時刻追れば盡きぬ思惑を残して楠門を後に市驛へと急ぐ。午前八時南海電車にて和歌山を後に北上す。紀の川の大鐵橋を渡り、山と海との間を岸に沿ふてひた走る。車窓よ、入り来る涼風を面に受け、鏡のごとき海面を眺めては思はず快哉を叫ぶ。既にして龍神驛を過ぎ堺市驛に下車。此處より水族館まで膝栗毛を試む。

大濱公園の閑かに美しき景色は先づ我等を喜ばし、水族館外の鯨骨と館内の大鰐とは山國に住む我等をしていたく驚かしむ。その昔繁いし堺港も今は淋れて懷古の念を誘ふのみ。

住吉に行いて住吉神社に詣づ。同社は古來船乘の神

と崇められ船人等の尊崇一方ならず。住吉公園にて晝食を喫し、頭上に飛行機の爆音を聞きつゝ綠陰に憩ふこと暫にして零時過ぎ愈て大阪に乗り込む。難波驛にて書記なる世森氏に出むかへられ、先づ程近き宿に不用の旅具を置き、造幣局、砲兵工廠の見學に向ふ。造幣局にて價格貳萬圓といふ白金鍋を見て仰天し、去つて川崎の渡船場を渡りて砲兵工廠に向ふ。一同その規模の壯大なるに目を驚かし、廣き構内を一巡して漸く玉造門に出で此處にて解散。六時半迄に宿に歸る豫定にて各自思ひ思ひの方へ向ふ。

夕食後外出を許さる。飯もそこゝに各々千日前、道頓堀等に走る、千日前は眞に大阪の歡樂境たり。中之島方面のイルミネーションは夜の街を美しく彩れり淀川は赤提燈一つを吊せる多くの貸ボートにて埋められたり。中之島公園にては電燈の光を浴びつゝランニングの練習をなす者、ブランコに乗る者などあり。都會の人のスポーツに對する憧憬の大なるに眼を見張る夜目に見る難波橋の美しさに加へて之に對するが如く聳立する灘萬を眺むればさうがは大阪なりと感ず。宿には歸れども、はや明日はこの大阪に訣るゝかと

思へば残り惜しくもいねられず。暮れんとする春の宵は若人の赤き血を浪うたせつゝ更けゆく。

御嶽富士踏破記

第一隊

橋詰 與惣次郎

二十五日 第一日 彦根より木曾福島まで

仙客來遊雲外巔

神龍栖老洞中淵

雲如紈素烟如柄

白扇倒懸東海天

石川丈山

智者は山を樂しみ、仁者は水を樂しむと言ふ話だが花月先生佐久間先生桃井先生。先生は別として尠くとも十五人の吾々同人は、そんな意味でなし、唯何となく山野を跋渉する事が好きでならない。伊吹山、さては比叡、比良、成程名山には違ひない。が然し、伊吹山などは、スキを擔いで雪さへあれば毎日曜日でも出掛ると言ふのだから。與へられた夏休み。暑い位は何んのその。水の柱をオツ立てて、螢籠の様な着物を着用に及んで煽風器で風を起し遊ばしても、矢張り暑いとの仰せ。元氣な赤鬼健兒が、夏などに、征服され

氷砂糖もよし、雷鳥に遣る餌もよしだが。仲々以て夕方彦根發の時刻が來ない。晝寝をしてやれと天井と睨めっこをして見たが眠れない。さても日永き夏の日やでも、まあ物憂き下界よなあ。時は來た。彦根の街が夕べの幕に包まれて、軒に電燈の灯、人々が團扇を持つて表の涼み臺にノタクリ出る頃。汽車は憧憬の一行十一人を乗せて、雪溪の彼方へと轟進し出した。

實にこれ、痛快一ドン。でなくて何んであらうぞ。ナンダカンダと云つて居る内に汽車は故郷の地を放れて美濃路へ入つたらしい。成程日本ラインも鐵橋を汽車で通るとツマランもんだ。明日は此の川の源なる透徹した青い湖の畔に立つのだ、岸邊を埋めるナンキン小櫻、蟲取草の微笑むのを見る事が出来るのだ、なご考へてみると、名古屋へ着いた。名古屋はもはや治外法權の地だ中央線に九時頃近くに乗り換へると汽車の込む事夥だしい。六根清淨運もある、俗人ばかりも多い。(堪忍して呉れ給へ、自分の心は羽化登仙と云ふのか何か遙か御岳の頂に立つて落日を見たり、麓の家で雷鳥の肉を食はされたりしてゐて、心此處にあらずなんだから、)腹が減つては何とやら、辨當を食つ

てなるものか。まあ思つても見給へ、日本アルプスのテッペニに立つて北海を眺めたり。雲の海の上から出る御來迎を拜したり又は靜夜山頂に立つて、燐爛と輝く無數の星で飾られたやうな蒼空を仰いだりする時の心持ちは神聖の感を起さずには居られぬ。其の他幽遠な高山湖、新鮮な空氣、夕陽の照輝、遠山の淡霞、千紫萬紅のお花畠、大雪渓、かう言つた丈で吾々の心は翅あつて自由に大空をかける事の出來る鳥の様に無限の喜びを感じて、彼の踏破した神秘郷に彷徨する。デヨン、ラスキ氏も「風景の美は唯山岳に盡きて居る私の心醉する所は、此の山岳と、而して特に、山岳の域に達せんとする第二流の風景である。低地の花卉森林、或は開け放した大空を見るにつけても面白いと思はるゝが、然し此等のものから受ける樂みは例へば、會心の書を讀んだり、温室にボツリと咲く所の花を眺めるやうな、静寂な、冷たい樂みである」と云つたが全く以て我が意を得たりである。

初、試験は終へた。待ちに待つた休みは與へられたり矣だ。

リュクサツクはよしと、アルペントツクもよし、

て、こんな時には寝るのが一番だがなか／＼以て、腰を掛けれる場所もない有様だから寝られさうもない、汽車は幾つかのトンネルをくゞつてるらしい。時々汽笛の音が聞えて来る。愈闊門をくゞつて高原へ近づくのだな、と會心の笑をもらしながら、しかも通夜なので内心にはおたやかならぬ不安をも藏してゐる、大部分の乗客は上松で下りたが次が木曾福島なので、休む間もない、時計は十二時を指してゐる、暫らくして福島に着く高原は流石に寒氣身にしむものがある。

廿六日 第一隊 河村庄次

午前四時半頃黒澤口についた。我等は愈五時に出發した。

木曾川の上流實になんとも云へぬ好い景色だ、いよいよ山にかゝつた。

暗雲深くござし今にも降りさうな様子だ。平坦な道だ一合目二合目と各茶屋に休息して行く。一合目では谷を隔てゝむかふに聳えてゐた山も二合目まで來ると同じ高さになつてゐる少しも山に登つて行くと云ふ感じがしない。宛も田舎道を歩いてゆく様な感じだ深い谷間に一軒の藁家から朝げの支度が一條の煙が出てゐ

て長々々遂に山の中腹で消え去る、一幅の繪だ恍惚として見される「此處らの子供は何處の學校に行くのだらう冬になつたらゆけるだらうか」生徒らしい事を心配して居る、三合目にかかる時分から雨が降りかけた三合目で松葉杖の四十五六歳の人が降りて来るのに出合つたあのらしい山をと後から考へてホトト感心した、三合目からは人家全くなく山らしくなつた、併し石屋の小屋が屢々見受けられる□大神△大神と赤金色の墓石が立つてゐる白衣に身をまとつた御嶽教の人々がその前で經文をとなへてゐた、宗教の山だ今一息で四合目、四合目の茶屋は見に來るその時の急坂汗をグツスリとかいた四合目の茶屋には瀧が落ちてゐた今の汗も早やひいてしまつて寒さへも感じて來た下山の白衣の人が其瀧に打たれてゐた五合六合朝來の曇天からりと晴れた日本晴「お山は晴天六根清淨」
合間／＼に鈴の音がチリン／＼ときこゑて來る「お上り」「お下り」下山者と登山者との間にかはされる。先頭部隊と後方は遙か離れてしまつた。六合目を少しゆくと、木で段々が作つてある。我等は又森林帶に入つた。何處まで行つても何處までいつても段々だ。え

らいもう何も話す者もない。沈黙の中に進んで行く。散々バラ／＼だ。一人或は二人宛歩いて行く。呼吸はにらくなつて來る。汗は脊におつて居る。リツクサツクにまで浸み込んで來た。名も知らぬ鳥が啼いて居る七合目段々はまだ續く一時だ七合目を出て半分まで位來たら段々が終つた。坂は急はしくなつて來た。白樺の木のある八合目をすぎると草木とては石ころの道だ。遙か下から雲が押し寄せて來る。下を見下した時頭がフラ／＼とした高山病だ。一人ボツチで怖くなつて來た。後の人々の來るのを岩陰で待て居る今度歩き出すと足が痛くて歩かれない。

「九合目までは何丁ですか」？

下山者に尋ねるとその答はきまつた様に「五六丁です」五六町先で聞いたのも今聞くのも五六町、厭になつて失ふ。足は益々痛くなつて來る。九合目をすぎた絶頂絶頂が見える。雪、雪、雪だ。一の池の地蔵で一休みして又歩き出した。風はヒュウ／＼と吹く。汗はかわいてちびたくなつて來た。絶頂の茶屋だ。やつと茶屋について、やれ安心、到頭御嶽を登つた。時計は四時先着は二時頃着いて寝床の中で高いびき。頂上の

スタンプ等をもらつて居る中に日が暮れる夜は足にスバルタ活力等を塗つて居るこうなりや足が第一だ。

「此の様に足が痛くては富士は登れないぞ」

弱音をほくものもある。

「餘裕綽々今からでも富士位は登る。」

にらい元氣なものもあるが、その日の疲れで、すぐ熟睡して失つた。その夜の飯の不味のには閉口した。

廿七日 第一隊 大橋正太郎

「御来光ですよ」

と云ふ聲に呼び起された服のまゝ寝て居るのだから、わけがない、そのまゝ飛び起きた夜具等はジト／＼として居る足が未だ痛い門口では多くの人が見て居る。雲の海だ遙か彼方に富士が見える「富士が見れますよ」
「何處に」人々の口から發せられる團々たる太陽が遙か彼方の雲の海から現われた。僕等は云ふべき言を知らなかつた。たゞ突然と見惚れて居た、朝飯今から山を下るのだ腰が減つては戦が出來ぬ不味い飯を無性やたらにつめ込んだ。

宿を出發して御嶽本社に參拜終つて河村技師の撮影七時愈下山の途についた。

で通り合した老婆に上松は汽車の行つた方向か或は反対の方向かと問ふて見たらざちらでも行けるとの返答我等一本參らされた形。

驛で聞いて見るとあの汽車が材木を積んで來るのに乗るのだと事故一安心一時汽車は來た材木が積んである車ばかりだ、客車などは一つもないと乘るのだろうと思ふと皆材木の上に乗るのだ。此邊の人は皆この材木の上に乗つて隣村まで出かける、勿論無料だ、但し負傷の際の責任は負はず、今正に汽車が發車せんとして居る時佐久間先生の一行が走つて來られた。汽車が動き出した、日本ラインに沿つて斷崖の上を走つて行く此の様な景色の良い所ばかり走つて居る汽もないだろう、數十丈の下其處には水が渦を卷いて居るあちらの岩の上では竿をたれて居る、僕等は材木の上に乗つて居る危険も忘れて快哉を叫んだ、此の邊の子供等は此の漁車にのつて學校に通ふのだそうだ、道々御嶽宗の白衣の人々が美しげに僕等の乗つて居るのを眺めて居る、可哀そうな様な慘しげな様な變な氣持だ、次から次へと現はれて來る奇景絶景旅行の興味は此處だトンネルは弱つた、屋根がなく頭がぶちあたり

そうで併しそのトンネルも長いものはなく又トンネルを通してむかふの景色のみ見るのも面白かつた。木曾の名所の吊橋を車上よ見ながら上松驛についた、この思ひ出多き漁車に別れを告げて此の漁車にもう一回乗つて見たいこの漁車の事は生涯忘れないだろう。上松で一風呂あび花月先生の一隊と合して六時福島にむかふ。

廿六日—廿七日の記　　家森季次郎

彦根——上松間

七月廿六日僕とAとNは午後六時彦を出て柏原なる花月先生の宅へと向ふ。

先生の宅はお寺で有つて非常に古い、史を持つて居るやうに思われる。境内は廣くて木が繁つて居て非常に静かである。

奥の新立へ案内された。そして今晚は先生の御宅で厄介になる事にした。

明くれば廿七日よく晴れて雲なく浮き立つ様な青空が大地を覆つて居る。六時起床。御挨拶もソコソコで大急ぎで驛に行つた。肩にリツクサツクを掛けた登山家らしい自分の姿は甚だ恥しい様な氣がした。汽車が

動き出した、名古屋に降り大分、時間があるので市街へ見物に出る。

名古屋は我が國でも屈指の大都會であり大きな河の下流を占めて居て甚だ繁華である。有名なものには名古屋城があり又僕等には忘れられぬ八高も有る。

繁華な所以は何であらうか？

兎に角繁華だから、ウカウカしてゐやうものなら電車に敷き殺されさうだ。橋の上に佇んで居ると巡査が追ひ立てる誠に都會は慘たるものゝ様に思へた。

中央線に乗り込むと汽車はゴトリゴトと動き出す。

此處等の周囲の景色是非常によい。原野が盡きて兩側から嵯峨たる連峯が逼つて走つて來る。そして幾つも／＼山を越えて隧道を越える。

太い短い夏の光線が列車に襲ひかゝつて來ると次第／＼に氣が遠くなつて行つて死の世界を彷徨様だ。

誰も彼も暑さに蕩けこんで動かない。或ひは口を開いたまゝである。或ひは目を閉ぢて居る。皆そうした

で死んでゐる様にも思へる。唯鐵橋を通る時驚いたやうに目を醒す。

もう大分驛を越えたゞらう。「多治見」と云ふ聲が耳にひびいた。頭にポンヤリと多治見焼きの產地だと直感した。

驛を出ると間もなく突屹たる山と山とが兩側よりつめ寄る。「マア絶景だ」とAが云ふ、成程よい景色だ大きな河が流れ大きな岩が突立つて居る。流れが勢よく走つて岩にあたる。水が礫けて白沫となる。其の白沫が高く飛んでもう少しで此處迄飛び込んで白沫と共に消え影も形も無くなつてしまひた様な氣もする一體自然と云ふものは人間に對して偉大な魔力を持つ一度引かれるとなれば英雄でも忽ち無くなつて終ふ是の邊りは日本ラインと云ふのだそ�だ。成る程さうだらう。ラインは歐人の憧憬の的となるものだが是程はあるまい、これから所々に發電所が見ゆる。山腹に大きな鐵の筒を幾箇も横へて其の下にこんな山奥には珍らしい西洋家屋がある。其處で電氣が太い導線を傳はつて野越の川を渡つて都に入る。そして電車を走らせ電燈を點す。その電車は人を數くかも知れぬ。そ